

西協順三郎の方法

長野 隆

西協順三郎という詩人は、淋しさを誰よりも愛した人のようである、その淋しさは彼の存在を語ることをいつも拒んでいるかのようである。孤独は、この詩人の最大の関心事であるにも関わらず、実体はわずかに呟のようなものとしてしか姿を留めず、淡やかな神秘的な栄光を纏ってはなさない。孤高という言葉を私たちは好まないが、西協順三郎にはこの形容がいちばん相応しいもののように想われる。どこか早すぎる老成を感じさせずにはおかない。無論人生論的な意味での年輪とか成熟とかいうものは恐らく西協の最も信用しない俗念であるに違いないが、彼は全く別の角度からこの表象にこだわりつつけていたと想像され、そう考えるといよ／＼彼の孤独は解き難い謎のように、その姿を視覚世界から退けようとする。だが落ちついてもう一度見つめてみよう、この稀有な孤独の色あいというものについて。

西協詩の孤独の音響はいわば淋しさの形而上学であって、詩人は世界から隔絶してもいなければ、世界との過酷な軋轢に疲れてもいない。西協詩からは、何か観念的な疲労にとまらぬ感傷のようなものが形なく私たちを包みこむのである。寓喩的に表せば、この孤独は、どこか人気がない旧街道かそこいらの路端に腰を下ろして、この赤いゲンゲの花の美しさはどうしたものかと考え込んでいるうちに、あふれすぎる光と速すぎる時とにわけもなく置去りにされてしまった人のような、そんな孤独を訴えてやまない。立ち去った人の後姿ばかりを私たちは追いつづける。一本の草花の不思議に見入っていた人の幻影の後姿を、そこに残された一本のありふれた草花を手にして探し出さねばならない。

西協順三郎の詩は美しい。美しいが、詩に驚きを与えない。私たちが驚くとすれば、詩ではなく、むしろそこに映し出された詩人の

面貌というものに対してである。クローズアップされた大きな詩人の胸中にはいつも太古の哲学が宿っており、思索は時間の壁を道草するように往き来しているのだ。私たちは彼の思索を遠くから見守るか、彼とともに詩の自然の中を散歩して行くかである。万葉の植物を散見しながら時にはたおやめや着流しのおきなにも出会う。藪陰にモジリアニの顔をした女を見たりアインシュタインとも挨拶を交わす。想像にあまる豊かな自然が、詩人の思索とともにそこに在るのだ。この場合、西脇詩の理念がそのようなものであったと言えるのだ。この場合、間違いない分だけどこかとるに足りないのだ。自然派、超自然派など、問題はそんな簡単なイデーでは解きようがない。西脇には変革期のダダイスト達が迫って行った農本主義への道もなければ、昭和の浪漫派達の導き出した日本への回帰もないのである。歴史とか自然とかとは恐らく確実に切れたところで、彼は自然を旅する自分の姿をつくり出したに相違ない。『幻影の詩人』、『永劫の旅人』は、ほかでもなく西脇が詩の中につくり上げた自画像のようなものであった。そして実際のところ、西脇が詩に求めているやまなかつたものもそれだけであつたように思われる。彼が意識的に行なつたもの、意識せずにはいられなかつたことを、私はここに仮説として立て、西脇詩の方法について考えてみる。

*

西脇順三郎は、いわば「偶然」にとりつかれた詩人であつた。詩

の神秘というものを徹底的に信じ通した人であつた。しかし、詩の偶然を信ずるということとは詩人において比較的ありそうであつて、実は最も信用したがらぬ通念というものである。詩人は偶然を表現の裡に所有しようとする反面、創り得た偶然を自己の肉体や生活に引き寄せることを忘れぬものだ。偶然を折々に創出する己が精神の内在律を、みずからに固有な肉体的表象として因果的に意味づけたくなるものである。つまり必然的なものとして、この一見して自家撞着的な志向の分裂は、当の詩人の内側では円環的につなぎ合はされ、詩作というものの、例外的では決してあり得ぬ独特の孤独を演出することになるのである。西脇もまたその孤独者の一人であることに変わりはない。このような分裂の構造とそれがもたらす孤独とは表現行為自体が担う宿業のようなものであらうから。だが西脇順三郎という卓越した詩精神は、かかる宿命の矛盾をみずからの肉体に或いは表現に抱えこむのを、少なくとも潔しとしなかつた、そう私は考えるのである。すなわち、詩は必ず偶然であるべきだ、という具合に。では、詩を徹底して偶然の所産と考える、というのはどういうことか。この輪郭を引き出すためには、詩に対する詩論の役割を確認してみるのがよい。先の宿命の分裂は造作なく浮きぼりにされるはずだ。

元来「詩論」というものがその表現において決して逃れることのできない約束は、詩というこの得体の知れぬしろものを、ともかくも意味づけなければならぬという、不自由以外にはなからう。西脇も、

詩論はみんなドグマである。

〔超現実主義詩論〕

と言っている。これは、みずからにおいては謙虚に、他に対しては痛烈な批判として生きている表現である。詩を表現者の内的必然と考えるかぎり、これを意味づけようとするその詩人の詩論はすべてドグマに捕われる。つまりこれは、詩という偶然をみずからに必然化する操作に他ならぬから。

詩を論ずるは神様を論ずるに等しく危険である。

〔超現実主義詩論〕

西脇にとって、詩は絶対である。詩人に詩論は無い方がいい。神様を人間界に引き寄せるのは愚劣である、と彼は言っているのだ。

しかし、詩を表現者における偶然の所有と考え、彼の生活と彼の肉体とも切れた所産であると信仰すれば、詩論は、その人なりの神学であるか哲学である。

詩を考えることは自分にとっては一つの哲学である。

〔現代詩の意義〕

これは哲学者が文学を論ずるというのではない。また、人生哲学をのみ指すものでもない。詩論が哲学であるというのは、存在とか絶対とかいうものに向けられる、思索の形而上学的等質性を言った

ものに相違ない。しかし、西脇は詩論をドグマから解放することはできたかも知れぬが、依然として詩の偶然をみずから生み出さねばならぬ詩人の宿命から解放されたわけではない。皮肉なことに、西脇がかくも詩を絶対化し偶然化すればするだけ、詩は彼の肉体や精神からいよ／＼遠いものとならざるを得ない。これは自明のことだ。彼は、詩の偶然を所有せねばならぬ詩人の使命と、詩の偶然を絶対化してみずからがそれを突き離さねばならぬ詩論家の良識とを、同時に引き受けなければならなくなる。しかもこれは他の詩人の場合に当てはまるよりは、はるかに純粹な要請であると言わねばならない。だから、西脇がそのような詩人であるためには、何をおいても彼は恒常的に自己の偶然をつくり出して行く方法を案出しなければならぬのである。西脇が、

私には偶然が女神である。／詩の作品が詩になるためには、何か神秘的な偶然が必要である。

〔現代詩の意義〕

と言ったとき、その時彼は女神の再来を、その気まぐれでしかあり得ない神秘の到来を、どのような思いで待ちうけるのであるか。西脇の老いを知らぬその多作な活動は、女神の気まぐれをいつの間に導き寄せていたのか。かかる困難を実現する唯一の方法は、恐らく、自分という偶然を詩の中につくり出すことだけである。

若し芸術において天才というものがあればそれは偶然の存在で

ある。

〔ポイエテス〕

これは誤解を招きやすい一般真理であるとともに、西脇にとつてはそれ以上のものであるにちがいないのだ。だが考えてみると、自分という偶然をつくり出すことは、詩の偶然を所有することと同じく曖昧であつて簡単なことではない。仮に可能であるとすれば、具体的にはどのような方法であるか。意味づけるのに許されるのは言葉だけである。

西脇順三郎が表現としてとつたこの方法は、すなわち、自分という偶然を普遍的な一つの像として或いはロジックとして、詩の中に表象し、意味づけて行くことであつた。だから西脇が「私には偶然は女神である。」と言うとき、実は「偶然」は氏においてあらかじめ理念的なレベルにまで引き上げられていることに気づかねばならない。これでは詩にならぬではないかと、私たちは素朴に思う。しかし、やはりこれが西脇のポエジーであると私は言わざるを得ない。

なぜ私はダンテを読みながら

深沢に住む人々の生垣を

徘徊しなければならぬのか

追放された魂のように。

青黒い尖つた葉と狼の牙のような

とげのある山櫓さんごの藪くさになつて

十月の末のマジエンタ色の実のあの

山櫓の実を摘みとつて

蒼白い恋人と秋の夜に捧げる

だけのことだ。

なぜ生垣の樹々になる実が

あれ程心をひくものか神々を貫通

する光線のようなものだ。

心を分解すればする程心は寂光

の無にむいてしまふのだ。〔「山櫓の実」、『近代の寓話』所収〕

「なぜ」という問いに導かれて山間をさすらう〈私〉は、行為の目的性と因果性から解放されている。〈私〉が会出现現実、すべて「遭遇」という形式をとる。つまり〈私〉という「偶然」は、自明な何ものにも拘束されてはならないのだ。自由な瞑想だけが許され、或いは保証されるのである。自由だから「ダンテを読む」ともするし「山櫓の実を摘みと」りもする。行為の価値は無価値な行為によつて意味づけられ、或いは消滅する。ここでは、すべてが〈私〉という「偶然」を舞台にして、当面の意味が剝奪され、現実それ自体はひたすら謎のような精神的音響をたてているだけなのである。だがよく注意すれば、この透明な音響にもかすかに色あいがある。ダンテを読む〈私〉の「心を分解すればする程心は寂光の無にむいてしまふ」というのが、西脇が詩の中に忘れずに書き留めたいたたかな「声」である。私たちは現実から眼をそむけることはできても、耳をそむけることはできない。人によつてはこの「声」は、

いささかうるさく感じられるかも知れぬ。文学から「声」を聴こうとする者にとっては慈訓のようなものとなり得ても、音の純粹に慣れた耳には少しうるさいかも知れない。しかもこの「声」は、氏においてまさにそこに獲得されつつある「偶然」という孤高の高みから、ほぼ同軸的に照射されてくるという厄介なものなのである。西脇詩に異和を読みとる素朴な詩精神は、恐らくこの種のリアリティを見ることができないのだ。

どこへ行くのだと読者は思うだろうが
われわれは三つの部落を通りぬけて
粘土の山の上にある部落へ行くのだ
特に関東最大なタランボウの木のある家
へ行くのだ

(中略)

なぜわれわれはこゝへ来たのか
俗人の好奇心はうるさい
疎閑していた三馬と豊国と伊勢物語と
ニイチエの全集とメーテルリンクの蜜蜂の生活
をとりに来たのだ

〔粘土〕、『近代の寓話』所収)

目的と興味とを私たちも捨てれば、この詩の表現など、ほとんど悲痛な声のから回りではない。汝姿を見せぬ仙人よ、汝もまた我等が俗衆と膝を交じえ、アザミの咲く縁側で将棋(しょうぎ)でしよう、と言

いたくなる。したがって少し乱暴な言い方だが、詩に仮託された西脇という存在が孤高であるというのと、どうでもよいということとは、紙一重であると考えてもよいのである。「人間の存在の現実それ自身はつまらない」(「超現実主義詩論」と言って、すべてに情熱を控えることによって西脇は何かを手に入れたが、私たちが関心を捨てれば、それは全く用をなさないのである。それはまぎれもなく西脇詩の構造、正確には西脇の文学の方法が、そのような構造をとっているからであると断言できる。考えるまでもなくこの方法はむしろ詩論のそれであると言わべきであるから、いわゆる「詩の偶然性」とはどこか決定的にかみ合わないものを引摺りつづけることになる。西脇もこの事実を眼をつむっているわけではない。

考えてみると、自分は詩という作品を作るよりも、詩ということを考えて来た方だと思ふ。一般的にいえば、文学を作るよりも、文学ということを考えてばかりきた方だということになる。／俗にいえば、描かざる画家に等しいものでもある。／しかし詩ということを考え、それを追求して考えつづけることは自分にとっては一つの詩である。

(現代詩の意義)

彼が「考えつづけ」てきた「詩」というものがどのようなものであるかが問われないかぎりこの表現は常識の域を少しも出ないが、西脇の偽らざる実感であることには注意をはらおう。ここにあるのは術に先立つ謙遜などでは元よりないのだ。「詩は方法であるにす

ぎない。」「私の詩作について」とは、むしろ西脇個人によって初めて意味を与えられる、詩への素朴な開眼のようなものである。

このように西脇順三郎という詩人にとって、詩と詩論とは等質のものであった。だから彼は詩論をドグマティックに語らずに済んだし、同時に詩をドグマティックに愛しつづけることができた。ドグマから逃れることができなかったのは、あるいは西脇詩それ自体であったかも知れない。しかし見方を変えれば、自分という偶然を詩においてつくり出すこの独特の方法によって、西脇は近代詩に稀れにみる完璧性を与えることができたのである。このみごとな均整は、西脇詩というものに対して恐らく何一つ理論上の批判の矛先を向けることが不能なばかりに、練え上げられた独自のものであった。唯一批判となし得る手段があるとすれば、ただ彼の詩を黙殺することくらいであったろうか。いちはやくこの事実を黙認を許さずその構造を決定的に読みとっていたのは、西脇の master 萩原くらのいのものであった。

此処に於てか西脇氏の詩論は、自己の生活する現実環境と関係なく、単にその外国語的イメージの觀念上で、超自然の真空中内に揚つてしまふ。即ち言へば、それは時間空間にも関係なく、因果の法則とも絶縁して、単に論者自身だけの頭脳——骨によつて囲まれた一つの物理的スペース——によつて構成された、一の非実在的な自己イリュージョンに過ぎないのである。しかもこの自己錯覚的なイリュージョンで、現代日本の詩を論じ、

実に存在しない虚像の物で、実に現実してゐる世界を観念づけるようにするところに、西脇詩論のあらゆる夢魔と荒唐無稽が生み出される。

〔西脇順三郎氏の詩論〕

これは詩論を論じたものであるが、裏側から詩にとどいてしまつてゐるようで面白い。萩原のように「詩の必然」の上に立つた者には、西脇の詩（詩論）は、どうでもよいことにこだわっているように映るのだ。本当のところ萩原には西脇の手口の巧妙さは分つていなかったのかも知れない。だからこそ、逆理的にその構造を言いあてることができると言い得る。正確には西脇の詩論は「非実在的な自己イリュージョン」とは以て非なる、実感によつて築かれたものに相違ないが、萩原のような詩人にそのように視えたということだけで実は西脇詩にとつて最も痛烈な批判となり得てゐるのである。この論評が『旅人かへらず』の刊行に十年先立つ、西脇詩出版の途上に書き与えられたことは確かに或る種の驚きを感じさせる。

ところで、先に西脇詩が完璧であるということ述べたが、これは、詩人が仮象の上にもともかく常に「自由」であるということに他なるまい。自分という偶然を詩の中につくり出すことによつて、九分九厘彼は自由であり自在でありつづけることができる。西脇は次のように言う。

思考の自由の中に生活が常に新鮮に保たれてゐるが、行為によつて思考は自由を失う。

〔ナタ豆の現実〕

これは確かに条理である。ただ、彼もまた表現者であることに
いて、詩を行為から絶縁させることはできないはずである。西脇は、
行為に目的性と因果性を与えぬことによってそれを回避しようとし
たが、行為そのものは消し去ることができない。言え、**「書く」**と
いう行為だけは、それがどのような形であれ必ず残るのである。西
脇も、

絶対的に完全な詩は作れない。

〔考えをかくすもの〕

と言っている。恐らくこれは書く行為を捨てずして詩は創れない、
というのと少しズレたところで同じ響きをもつものだ。一見して平
凡なこの事実は、西脇においては黙過できぬ重大な意味を抱え込ん
でいるのである。つまり、西脇は、自分という偶然を保つために、
書きつづけなければならなかったのである。彼は**「書く」**以前から
自由であり偶然であることはなかったはずである。見たところ自由
な私境からあふれ出るが如き西脇詩特有の饒舌は、みごとに彼
自身の自由を支えるためにも欠くべからざる唯一の手段なの
であった。だから**「絶対的に完全な詩は作れない」**とは、**「絶対的に
完全な自由はない」**と同義である。そうすると西脇は書くことで自
由を得ることはできるが、書きつづけることから解放されることが
ないという、氏にとっては多分に皮肉な状況をつくり出しているこ
とになる。例えば、晩年の西脇のその老いを知らぬ多作と饒舌が、

いったい彼の自在な詩境の反映として生まれた出たものであるか、
或いは以上のような彼の詩のもつて生まれた構造上の宿業として産
出されたものであるかは判断に窮するところであるが、恐らくこの
ような二者択一は意味がない。両者は切り離せぬところに互いの根
拠をもっているからだ。このような構造は、無論想像するほど樂觀
できる状況ではない。西脇は偶然という自己の仮象を全的に保ちそ
れを現実の己自身につなぎとめるために饒舌でありつづけなければ
ならない、というのだ。まさしく詩酷としか言いようのない現実
である。不思議なことに『旅人かへらず』以降の詩は、どの一編を拾
い上げても、一詩編は全詩編の歩みを暗示するようであるし、同時
に現実の西脇の詩作の全行呈をあたかも人生論的に包み込んでい
るようでもあるのだ。いわば彼は**「絶対」**（偶然）を生きたために**「宿
命」**（必然）を生きたとおさなければならなかったのである。言い換え
れば、己が偶然との出会いを私たちに必然化するために、彼は永い
時間を歩みつづけているようなものである。これは気の遠くなるよ
うな**「旅」**ではないか。そうすると、**「旅」**は、西脇の**「方法」**が身
体的につくり出した不可欠の形式であつたと考えることができる。
無論、旅のモチーフを彼は意識したのではない。彼は詩の中で本当
は旅などしていない。旅があるというのは、正確には西脇において
捨てることのできない表現という旅ということになる。**「永劫の旅
人」**に安住の場はない。とすれば、

人間の存在自身が淋しい。

〔超現実主義詩論〕

これなど、「宿命」をみずからの裡に確認した人の独り言のようにも聴きとれるのである。この思ひは、自然の拡がりや時の流れの無限を前にしてともかくも歩みつづけねばならぬ一人の痛切な思ひに連続する。西脇の淋しさは、認識の孤独を想わせる。それは決して「偶然」の船に乗った人の不安や淋しさではない。いわば「必然」の海に投げ出された人の淋しさである。いつまでも生かされて、目的もなく永い道のりを歩み通さねばならぬ人の、気の遠くなるような孤独に喩えられるものである。

幻影の人は去る

永幼の旅人は帰らず

（旅人かへらず）

この美しい言葉から、西脇が旅人の行方、その先々に見たものは、たして本当に「永遠」とか「無」であつたろうか。そういう哲学よりは、私には、振り返られぬ西脇の姿のようなものが感じられて少し痛ましく思う。背を向けた孤高の異神は、限りなく淋しがりやであるかも知れない。

如何なる宏大な哲学思想よりも槌の実の渋い、いたましい、ささやかなる生命の方が尊い。

（現代詩の意義）

これは彼の好んだ洒落などではない、実感である。孤高の人は

「宿命」に身を寄せることによって、存在の可憐を見過ごさなかった。この愛（性愛のそれではない）の獲得こそ、実は西脇詩の最大な魅力であるのだ。

私は詩にかすかなおかしみと、かすかな哀愁を求めたい。

（考えをかくすもの）

これは、自由（「おかしみ」な存在（「哀愁」）でありたいということ、愛がいずれにも限無く機能していることを忘れてはならない。と同時に、このような愛（「温かみ」）が、ただ単に孤高の人の心の余裕から産み出されたのではないことを、もう一度確認せねばならない。西脇詩の二重の表情は、良くも悪しくも、愛を介在させて互いに無関係ではいられないのである。

*

以上のように考えてみると、西脇順三郎という一個の詩魂は、あたかも逆立ちした懷疑主義者の面貌を呈しているように見える。彼は、相対（関係）を押し出すことによって絶対（無関係）を得ようとする。「ポイエテス」の中で彼は、

「有」をプラスとし、「空」をマイナスとすれば有と空が結合して「大空三昧」となる。／詩の世界の極地は相反するものの結

合して調和されたものである。その極地は無である。詩のすぐれた世界は無の世界である。詩の最大な洒落はこの無の世界を象徴することであろう。／＼
すなわち芸術作用の方程式は「超自然＋自然＝ゼロ」である。
最大な調和はゼロである。

と述べているが、氏のいうように「無」と「ゼロ」を「象徴すること」が「詩の世界の極地」であるというなら、私たちは改めてその「無」と「ゼロ」とが、西脇の恐ろしい饒舌のもとでしか暗示され得ない性格のものであることを確認せねばならない。「私には偶然は女神である」と言った西脇は、何と永い単調な時間を詩の中で歩み通さねばならなかったことか。彼は永劫の旅をするようにしか己が詩の偶然を保つことができなかった。そして詩の偶然はしかと与えられたかといえ、皮肉なことに、『旅人かへらず』以降の西脇詩に私たちがあまり驚かなくなつて行つたことの方が、より確かな事実を提供しているのである。「驚き」こそ「偶然」を捉える最大な尺度と言うべきで、むしろ西脇詩に驚きを読みとるのは、そのマニエリスムの意欲的遂行に伴って現われる、詩人という巨大な面貌以外の何ものでもないのである。この現実には、西脇詩の特異な価値とその限界とをいちはやく教えているのである。

彼のつくり出した自然や時間の中を、私たちもまた永劫の旅人となつて歩いてみることはできる。旅はいろんなことを教えてくれる。西脇の思索のもとに引き寄せられた仮象の自然の中を歩いていれ

ば、「無」とか「永遠」とかの意味も、それとなく暗示されるというのだから。そうすると、私たちは光あふれる自然の中を彷徨しているようであつて、ひょっとすると現実には詩人の「書斎」の中を歩き回っているのかも知れない、「脳髓」という西脇の書斎の中を。

(1984. 1.31. Hiroaki)

※ 引用はすべて筑摩版「西脇順三郎全集」に拠つた。